



梅崎昌裕.『微生物との共生——パプア
ニューギニア高地人の適応システム』生態人
類学は挑む MONOGRAPH 9. 京都大学学術
出版会, 2023, vi+234p.

ここ数年のうちに、腸内細菌、あるいは腸内フローラ、という単語が一般にも知られるようになってきた。私たち人間の腸、特に大腸には、種類にして約1,000、数にして100兆、重さにして1キログラムの細菌が棲息しているといわれる。その一例として、大腸菌といえば、下痢症を引き起こす恐ろしい細菌だと思われがちであるが、下痢や腹痛を引き起こすのはごくごく一部の株であり、運悪くそういう株が外部から入り込んだときだけ病気になるが、実は私たちの体内にはもともと大量の大腸菌がいて、それらは無害であるばかりか、腸内環境を整えて、宿主である私たちの役にすら立っている。別の例としてビフィズス菌もよく知られた腸内細菌であり、整腸作用があり、善玉菌とすら呼ばれる。新聞や一般誌などでは、腸内細菌が肥満症や生活習慣病を防ぐという記事がしばしば掲載され、最近では、健康に暮らすために腸内細菌叢を理想的な状態にするという「腸活」という言葉すら聞かれる。このように腸内細菌の利用には期待がもたれているが、学術的にはまだ明らかになっていないこともあり、多くの研究者がその科学的理解に取り組んでいる。

本書の著者が専門とする人類生態学という学問分野は、人類の適応と進化を世界各地におけるフィールドワークを通して明らかにする点において、生態人類学と同義として使われることもあるが、前者は後者よりも人間集団の生存と健康に意識が向いているという特徴もある。パプアニューギニアにおける人類生態学の研究はすでに半世紀ほどの蓄積があり、その初期は地域集団の生業戦略や時空間利用についての生態人類学であったが、その後身体や生理機能の研究を含む、医学的分析手法を取り入れて、現在の学問を成した。一例として、各地の食事を研究者がみたとき、人類生態

学・生態人類学は共通して、動植物利用、栽培・飼育、採食・農耕の時空間利用、在来知識といった側面に注目するが、人類生態学は食事を構成するエネルギー（カロリー）や栄養素（タンパク質など）をも調べる。この食事調査は、生存あるいは健康を維持するためにエネルギーや栄養素が充足するかという側面から行われた基礎調査であるが、20世紀末からパプアニューギニアで肥満症と生活習慣病が増えたときに、食事のどこに問題があるのか、どこで食べすぎているのかを知る研究にも役立った。

さて人類生態学は、食事を調べることで、集団の生存戦略と健康を明らかにしたつもり、肥満症や生活習慣病の原因を明らかにしたつもりになっていたが、いまになって腸内細菌の働きが栄養素の摂取と各種の病に関わることがわかってきた。この時代において、人類生態学はどうすればホモ・サピエンスの適応メカニズムを科学的に明らかにすることができるのであろうか。本書はそのような悩みを抱えた人類生態学者が、フィールドワークに基づく古典的な人類生態学と、実験科学に基づく腸内細菌研究の溝を橋渡ししようとする書である。

まず各章の内容を簡単に紹介しながら、本書の概要を説明したい。

「序章」は、人類生態学（あるいは生態人類学）の根源的テーマであるホモ・サピエンスの適応と、近年明らかになってきた腸内細菌の適応をわかりやすく解説したあとで、著者の研究を時系列的に沿って概観する。続く第1章「フリの社会システム」は、本書の主な調査対象集団となるパプアニューギニア高地フリの社会と環境を解説する。この際、主食であるサツマイモの農耕とそれを成立させる生態条件が詳しく説明される。ブタの飼育も重要な生業であるが、ブタは日常的に食されるのではなく、社会的財産としての意味もあり、むしろ人々は収穫したサツマイモの半分もしくはそれ以上をブタに食べさせていることが書かれる。続く第2章「集団の構造と成り立ち」では、フリの社会が親族関係を基本としつつも、地理的には頻繁に個人の移住があるため、集団という概念も固定的ではないことなどが、解説される。

第3章「生業を支える在来知」は、フリの農耕システムの謎として、人々は化学肥料を使わないにもかかわらず、連作障害を起こすことなく、長年耕作を続けることができる点に注目する。著者は、人々が畑にいくつかの樹木を植えることに気づき、畑の土壌養分を低下させない植物利用の在来知識を調べた。住民によって言うことがあべこべで、困惑しながら調査を進める著者の様子が描かれるが、最後には在来知とは何かが問い直される。

第4章「高地の食生活」は、サツマイモをはじめとして、フリの食習慣を解説する。この際、食事調査の方法や、それに伴う著者の実体験も描かれており、いかにして適切な調査計画を立てるかなど、初学者にとって有用である。

続く第5章「長雨への対応」は、長雨という気象災害を取り上げ、平時とは異なるフリ社会の行動と栄養状態を調査した結果である。興味深いのは、気象災害によって飢餓状態ともいえる状態になった集団があった一方で、そうはならなかった集団もあったことである。そこで、著者は航空写真を用いるという、人類生態学におけるGISやリモートセンシングによる土地利用調査の先駆けのような分析をしたところ、過去からの人口増加が一部集団による土地の過剰な利用を引き起こし、生存条件の違いに関連したことを見出した。第6章「部族内戦争」は、そのような土地生産性の違いという生態学的条件を生み出す一因として、フリでみられた土地をめぐる紛争をまとめている。

第7章「ポートモレスビー移住者集団の生態学」は、高地を離れて首都ポートモレスビーに移住したフリの人々の研究である。多民族国家にあって、地方から首都にきた人々は、時にはインフォーマルな形で集落を形成しており、それはセトルメントと呼ばれる。このようなセトルメントに住み込み、大都市での生業や食事を調査するのは多くの場合困難であるが、著者はすでに高地でフリの人々と信頼関係を築いていたおかげで、調査を敢行し、都市の人類生態学という貴重なデータの数々を収集した。食事調査からは、首都では高地よりも、米や飲料からのエネルギー摂取が多いほか、肉類の消費が多いことが明らかになった。彼らの出身地、つまり高地ではめったに手に入らな

い食材であり、都市の食生活は、あまり健康的とはいえないものであるにもかかわらず、フリの人々にとっては憧れのものである。

そして第8章「低タンパク質適応」からは、腸内細菌の研究へと入っていく。まずこの章は、高地に暮らすフリ人が、低タンパク質の食事なのに、筋肉質の体型になる適応システムの不思議を話題に取り上げ、そこに腸内細菌が働いている可能性を取り上げる。第9章「糞便をあつめる」は、多くの研究協力者を得て、腸内細菌を分析するための糞便集めに奔走した様子を説明した後、分析結果として腸内細菌による窒素固定メカニズムが存在したことを明らかにする。ただし、このときの分析では、腸内細菌がフリ人ほど筋肉を発達させられるほどのタンパク質を作り出していることまでは説明できず、今後は未知の腸内細菌の探索や、より先進的な分析手法によって、そのメカニズムが明らかになることの可能性を示す。

「終章」において著者は、人類生態学あるいは生態人類学の魅力を語り、今後の研究の展望を語るが、その中で、ドメスティケーションと腸内細菌という斬新な視点について論じる。グローバル化する現代社会で、科学の進展が良いものとされ、科学や技術が先進国から途上国に移転される現状を淡々と述べながら、人類生態学者として、そういう現代が「望ましい」のかを問う。

本書の前半（4章まで）は、著者の苦労話も交えながら、人類生態学がどのように研究を計画し、調査を実行し、結果を分析してから、ホモ・サピエンスの適応についての新たな知見を得るかを、わかりやすく書いてくれている。そこで展開されるのは、その地域の生態環境における時空間利用、生業利用、栄養状態といった、いわば古典的な人類生態学である。後半（5章から）になると、人類生態学に新たな研究手法（GIS・リモートセンシング技術）を導入した研究や、それまで稀であった都市での研究を展開し、そして先端の生物学的な研究としての腸内細菌の研究へとつなげる。ここに著者が築き上げてきた、新世代の人類生態学が見えてくるようである。本書の通底したテーマはホモ・サピエンスの適応と進化であるが、著者自体が時代に応じて新たな理論と方法論を取り入

れて、人類生態学者として適応・進化してきている様子を見ることができる。

ただし、このような研究姿勢でいると、過去の自分の研究成果を、将来の自分の成果が上書きしてしまうということも起こりうる。例えば第3章では、フリの農耕が連作障害を起こさずに長期間続けられる仕組みを在来知識から分析したが、その後の5章でGIS・リモートセンシングの結果からは休閑期間の短い集団のほうで農耕生産性が低い（つまり連作による栄養低下があると推察される）ことを見出した。また第7章までは人類の生存をエネルギーと栄養素の摂取と消費というバランスから分析しており、人々が生産して口にする食料をみてきた。しかし、第8章以降、腸内細菌の働きによって、口にするタンパク質以外にも、腸内で生み出されるタンパク質があることを調査し、それこそが人々の筋肉質な体型の元になる可能性を論じた。新しい知見を得てから、過去の発見をふりかえると、どのように新解釈できるのかは、明示されていない。

しかし、このように過去の研究成果を自ら塗り替えていくことは、人類生態学やその他自然科学の視点に立った地域研究にとっては決してネガティブなことではなく、むしろ自己の研究の幅を広げ、科学を進展させることに貢献したというポジティブなことである。従来的人类生態学と腸内細菌の研究を結ぶ研究は、今後大きな発見につながっていくことであろう。

本書は、生態人類学会が刊行するシリーズ「生態人類学は挑む」におけるモノグラフの一冊である。同シリーズでは、生態人類学会から発表されてきた様々な研究が出版されている。中でも本書は、重厚な人類生態学の成果であること、先端的な科学を積極的に取り込んできたことが特徴であるが、同時に研究者がフィールドで悩み、知恵を絞りながら、貴重なデータを収集してきた生々しさが描かれる点が貴重である。人類生態学、あるいは生態人類学にかかわる、広い読者によって、長く読み継がれる一書となるであろう。

（古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

籠谷直人；川村朋貴（編）、『近代東南アジア社会経済の国際的契機』臨川書店、2023、387p.

18-20世紀前半のジャワ都市社会と貿易を論じる本書は、編者の一人である籠谷直人が代表を務めたジャワ海港都市社会経済史に関する共同研究の成果の一環である。以下、まず本の構成を示した後に各章を紹介する。

総説（籠谷直人・川村朋貴）

第1部 港市から植民都市へ

- 第1章 近代植民都市バタヴィアの誕生（植村泰夫）
- 第2章 近代植民都市バタヴィアと後背地（植村泰夫）
- 第3章 「マラリア撲滅」を目指して——蘭印植民地期の工学の進展とバタヴィアの水環境改善——（笹本浩子）
- 第4章 20世紀前半期のジャワの社会統合と現地人妻妾——インドネシア民族主義者の「混淆婚」観をととして——（弘末雅士）

第2部 華僑・華人ネットワークの中のジャワ

- 第5章 17-19世紀、バタヴィア華人コミュニティの形成と変容（城山智子）
- 第6章 20世紀初頭バタヴィアにおける客家系華商の台頭——神戸・香港を繋ぐ梅県潘氏を中心に——（陳來幸）
- 第7章 ジャワにおける包種茶の普及と華人流通網——20世紀前半期の台湾籍民の活動を中心に——（工藤裕子）
- 第8章 1930年代バタヴィアにおける日本製綿布の流通と華僑・華人商人（泉川普）

第3部 国際経済体制下のジャワ

- 第9章 オランダ東インド会社とバタヴィア——18世紀バタヴィアにおけるオランダのアジア域内貿易と本国貿易——（島田竜登）
- 第10章 19世紀中葉のジャワにおける銀流出とシンガポール（小林篤史）
- 第11章 「英蘭型」国際経済秩序におけるイー